

わたしの本たち

神谷万喜子（萬書房代表）

昨年（2014年）4月に出版社、萬（よろず）書房を創業し、ちょうど一年を迎えようとしています。一応創業とともに拙いながらも自社サイトを立ち上げ、「代表者コラム」のコーナーで出版にまつわるあれこれを随時掲載する予定だったのですが、ついつい後回しにしてきたため、いまだ「準備中」の札をはずせずにいます。上田さんから「これまでの出版に関わる経緯やさまざまな思いについて」書いてほしいと原稿の依頼を受けたときに、このコーナーで書きたかったことを書くよい機会だという思いもあり、お引き受けすることにしました。

市民研とのご縁

その前に、まず市民研とのご縁ですが、「月刊 家族ケア」という看護系の専門誌の編集を担当していたときに、「ひとりから」という雑誌に連載されていた上田さんの記事（「生命へのまなざしと科学」）を読み、ぜひ「家族ケア」にも連載していただきたいとお願いしたのがきっかけです（そのときの連載タイトルは「ケアと科学の狭間で」、2003年6月号～2004年4月号に掲載）。その後、別の出版社に移り、非配偶者間人工授精（AIDまたはDI）と呼ばれる不妊治療があることを知ったことから生殖補助医療に関心をもち、この問題に関する本をつくりたいと相談をもちかけたのが、2004年か2005年……。結局このときは、さまざまな困難があり、本をつくるに至りませんでした。それが現在の生命操作・未来身体研究会につながっています。

出版社勤務歴22年

わたしが出版の仕事にかかわるようになったのは1993年、上の子どもが2歳のときでした。以来22年、社会人としての人生の三分の二以上を出版の世界で生きてきたことになりました。転職を繰り返してきたせいか、あまり年数を意識したことがなかったのですが、あらためて22年という数字を見ると、感慨深いものがあります。

出版にかかわるようになったきっかけですが……。社会人になって最初の2年こそ高校教師という定職に就いていたものの、世界放浪の夢捨てがたく教師を辞めてからは、家庭教師や塾の講師などアルバイト的な仕事をずっと続けていました。当時はバブル崩壊前でそれでも生活ができていたし将来への不安もありませんでした。しかし、子どもが生まれ、仕事を再開するときに、このままではいけないとなぜか急に思い立ちました。子どもを育てていく責任として定職に就く必要があると。そして、本が好き、だから編集者に向いているんじゃないか、というなんとも単純な理由で就職したのが看護系の出版社でした。

就職した出版社が看護系だったのは、まったくの偶然です。実は、それまで出版社で働きたいと思ったことがなく、子どもが生まれる何年前、友人の働く小さな出版社で頼まれて発送のアルバイトをしていたときも、編集の仕事にまったく興味がわかなかった……今思い返してみてもその無関心ぶりは不思議なくらいです。食や教育、農業などとてもおもしろいテーマの本を出しているところだったのに、です。

看護系の出版社を紹介してくれたのは、その小さな出版社で働く友人でした。出版社で働くなら社会問題かなんかの本を出すところがいいなど漠然と想着いて、その友人からの紹介だったため、当然そこも同じような本を出すところだろうと思い込んでしまったのは、なんともお粗末な話です。どういふ本を出しているのか確かめもしないで面接を受け、頓珍漢な質問を繰り出すわたしに、とまどっていた社長の顔が今でも目に浮かびます。

それでも雇ってもらい働きだしたのですが、そこは社長一人、社員一人（つまりわたし一人）、アパートの一室に事務所を構える小さな出版社でした。看護について知識も関心もなく、出版についても何も知らないところからのスタートでしたが、最初が小さな出版社でよかった、看護系だったのもよかった、と今では思っています。

ただ、もともと時間に追われる暮らしが嫌で、会社員にだけはなりたくないと思っていたのに、それが一転、1分1秒にヤキモキする「保育園ママ」です。あの当時を思い起こすたびに、よくやったなあとしみじみ感慨にふけてしまいます。何せ、家の中でも走っていましたから。数か月後には円形脱毛症になっていました。

その後、何度も転職を繰り返しながらも編集の仕事を続けたのは、予感どおり、編集の仕事が性に合っていたからでしょう。そして、看護系から、念願の社会問題を扱う出版社に転職したのが2004年です。しかし、人権の〇〇と看板をかかげているわりには内実はお粗末で、組合問題で社内が紛糾、人間関係のあまりの醜さに嫌気がさして退社、主に数学や物理の本を出す理系の出版社に転職したのが2010年、これが最後の会社勤めになりました。

なぜ出版社をやろうと思ったのか

この出版不況の時代によく出版社なんか始めたね、と今でもときどき言われます。実際本は売れません。そうそう売れないとは思っていましたが、予想以上でした。本が売れないとかなり落ち込みます。今月末（2015年3月末）で最初の決算を迎えますが、売上は微々たるもの、これで2年目を乗り切れるのだろうか、ときおり不安が募ります。それでも、前の会社を辞めたことに後悔はまったくないし、出版社を始めたことにも後悔はありません。後悔どころか、これ以上ないタイミングで始めたと思っています。

では、なぜ自分で出版社をやろうと思ったのか、ですが、今の職場ではなかなか自分の出したい本が出せない、転職したとしても結果はまず同じ、自分の出したい本を出すには自分で出版社をやるしかない、もうそろそろ自分の好きにやっていたいんじゃないか、そんな気持ちの流れだったように思います。

そして、いくつも要因がその流れを後押ししてくれ、幸運な巡り合わせがあって思い切ることができた、ということだったように思います。

①自分の出したい本を出したい思いが募る——夏葉社との出会い

いくつもの要因のひとつが、夏葉社という出版社を知ったことでした。今ではかなり有名になっていて、ひとり出版社の代名詞的存在ですが、知った当時は創業して2年目くらいのときで、まだ数点しか本を出していませんでした。代表の島田潤一郎さんがインタビューに答える形で創業のいきさつを話しているウェブ上の記事を読んだのですが（夏葉社・島田潤一郎さんへのインタビュー〈第1回～第3回〉／みんなのミシママガジン・ミシマ社ウェブ雑誌より）、そこにはわたしのこれまでの「常識」をひっくり返すような話が次から次に出てきました。「ほとんど未経験といってよいのにひとりで出版社を始めた」「まったく面識がないのに、最初の本の装丁を和田誠さんに頼んだ」「本を出すペースは年間3冊くらい出せばいい（出したい本がなければ無理して出す必要はない）」に、軽いショックすら覚えました。何より島田さんが心の底から楽しんで本をつくっていることに感銘を受けたのです。

（以下、夏葉社・島田潤一郎さんへのインタビュー〈第1回～第3回〉／みんなのミシママガジン・ミシマ社ウェブ雑誌より）

<http://www.mishimaga.com/hon-watashi/056.html>

<http://www.mishimaga.com/hon-watashi/057.html>

<http://www.mishimaga.com/hon-watashi/058.html>

今回あらためて読んで、当時の感動を思い出しました。と同時に、自分でもひとり出版社を始めたがゆえに、より心に響いた言葉もありました。「まちのパン屋みたいな出版社にしたい」「心中してもいいと思える本を出す」「具体的なひとりの読者のために本をつくる」などなど。

このとき、島田さんの言葉と行動から、わたしも自分の出したい本を出したいとさらに強く願うようになりました。そして、わたしでも出版社をやれるかもしれない、と勇気をもらったのです。

夏葉社との出会いの前にも、自分の出したい本を出したい、の思いを後押しした経験がありました。

わたしは、小さな看護系の出版社から編集者としてのスタートを切ったわけですが、前にも書いたように、スタートしたときから子持ちでしたので、常にさまざまな制約がありました。一番の制約は時間です。これまで働いてきたどの会社でも原則、定時に入社し定時に退社、残業なし、その制約の中でいかに能率的に仕事をこなすかのスタイルを貫いてきました。四歳違いで二人目の子どもが生まれ、にもかかわらず子どもたちの父親とは離別、親としての責任と制約は増すばかりでした。その当時、時間に制約なく働けたらどんなにいいかと願わなかったわけではありませんが、一方で集中力が持続する時間には限りがある、たらたらと長時間働いたからといってよい仕事ができるわけではない、という自分の働き方への自負もありました。

それでも子どもは成長します。綱渡りのような生活から少しずつ余裕が生まれるにつれ、こんな本を出したいという思いが強まっていきました。わたしが働いた出版社は、看護系から社会科学系、理系と分野もさまざまでしたが、規模も小さいところから業界大手までさまざまでした。研究所の創業にかかわり、雑誌の創刊を手がけたこともありました。この雑誌はひとりで企画編集を担当していましたので、書籍ではないものの、自分で出したいものを出すおもしろさを十分に味わわせてくれました。

もうひとつ、実際に自分で出したい本を出す、貴重な経験もしました。ある出版社で働いていたことです。企画を出すもののなかなか通らず、割り振られた原稿をせっせと本にするだけの、ある意味編集工場で働いているような仕事の仕方にうんざりし、会社とは別に、編集プロダクションまがいのことを個人でやったことがあるのです。著者にコンタクトをとり原稿を依頼するところから、編集し印刷所に完全データを入稿するところまでを担いました。発行はある出版社にお願いして引き受けていただきましたので、一から十まですべてではありませんが、装丁も含め本をつくるまでのほぼ全行程を自分の判断で行ったわけで、その楽しかったこと。会社の仕事と並行して進めたので夜や休日に作業をすることになり大変でしたが、本づくりの楽しさを心ゆくまで味わうことができました。おまけにその本が幸運にも評価され、かなり売れたこともあって、喜びもひとしおでした。このとき、本づくの楽しさに目覚めたことが、出版社創業への最初のステップになったと、今にして思えば言えるかもしれません。

②家庭の事情も後押し

出版の世界で生きて22年、その間、2歳だった子どもは24歳、下の子も20歳になり、完全に親の手を離れました。経済的にも、下の子の学費が残るだけで、親としての責任はほぼ完了です。その上、住んでいるマンションのローンが完済したことで、支出が一気に減りました。それほど稼がなくてもよい状況になったのです。これは、出版社を始めるにあたって強力な後押しとなりました。

③転職で得た経験が肥やしに――既成概念にとらわれない

これまで何度も転職を繰り返してきたと述べてきましたが、それらの経験も、出版社を始めるにあたって、すべて肥やしになっています。よく言われることですが、どんな経験も無駄ではなかったとつくづく実感しています。

転職は、自分から望んでのこともありましたが、自分が望まない場合ももちろんありました。子どもをかかえ職を失ったときの絶望と不安、今思い出しても胸が痛みます。そういった自分は辞めたくなかったのにクビになった場合でさえ、じゃ、あのまま勤めていたほうがよかったかと問えば、今ではNOです。新たな出版社で新たな経験を積んだことがしっかりわたしの財産になっており、負け惜しみでなく、あのときクビになってほんとうによかったと思える……幸せなことです。

一つの職場で長く勤めることの長所はもちろんあるでしょうが、短所もあるように思います。さまざまな職場で働いてきて思うのは、出版といってもやり方はさまざまだ、ということです。ある意味当たり前のことなのですが、一つの職場で長く勤めれば勤めるほど、それが大手になれば特に、自分たちのやり方を絶対視する傾向にあるように思います。こうあらねばならないというものが多ければ多いほど、

身動きはとりづらくなります。

ちょっと面白い例をあげてみます。いくら小さいとはいえ、出版社を始めるにあたって必要なものがあります。今ではパソコンは必需品ですし、普通はコピー機もそのひとつです。「普通は」とわざわざ断ったのは、前の職場にコピー機がなかったからです（厳密には家庭用インクジェット複合機があったのでそれでコピーできたのですが）。入社するまでその事実に気がつかなかったわたしは、それを知ってのけぞるほど驚きました。コピー機がないなんてありえない！！（もっと進んで、ペーパーレス化となっていたわけではありません、念のため）ではコピーはどうしていたかという、数枚の場合は社内のインクジェット複合機ですませ、大量の場合は近くのコピー屋さんまで行ってコペーしていました。今でもこれはないと思っていますが、自分で出版社を始める際に、この経験が生きました。大きなコピー機が絶対に必要だとは思わなかったことで、結果的にとてもよい選択をすることができました。価格 2 万円台のビジネス用インクジェット複合機を購入したのです。主にプリンターとして使っていますが、コピーも連続で 30 枚まで可能です。速度は遅いのですが、一人で仕事をする分には今のところこれで十分です。そのうえ自宅の一室に置いても違和感のない大きさなので、自宅を事務所に行っているため、その点でもとても助かっています。

転職で得たものとしてもうひとつ例をあげると、DTP のスキルがあります。DTP とは、パソコンを使って書籍などの印刷物のデータをつくることで、ここでは印刷所に渡す最終データ作成までの作業を指しています。編集の仕事をはじめた 22 年前は、ちょうど DTP が普及しはじめた頃で、すでにパソコンはあったものの、一人一台というほどではなく、DTP を編集者がやるというのはまだまだ一般的ではない時代でした。でも、小さな出版社であるがゆえに、いち早く最新の技術を導入していたので、わたしも簡単なページ物ならつくれるくらいの技術を身につけることができました。パソコンでの作業が当たり前になり、DTP ソフトがどんどん進化して、ちょっと勉強すれば誰でも使えるようになってきた今でも、編集者が DTP を行うことに抵抗のある人は結構いるだろうと思います。しないほうがいいという意見もあります。しかし、転職するたびに、必要にせまられ、さまざまな DTP ソフトを使うようになり、最終的に今一番有能なソフトである InDesign をある程度使いこなせるようになったことは、ほんとうに大きな収穫でした。もしこのスキルを身につけていなかったら、出版社を始めたどうかかわからない、それくらいの重要度です。このおかげで、昨年秋からときおり出すようになった雑誌や新聞の広告原稿も自分で作成しており、経費節減に多に貢献してくれています。

④ どう生きたいか

出版社を自分で始める、ということは、50 代の半ばを過ぎてこの先、老後も見すえ、どう生きたいかと深くかかわってくることでした。

ここ数年、なるべくお金を使わない生き方をしたいと思うようになりました。何かあったときに自分で食べるものくらいは自分でつくる生活をしたいとずっと思いつづけてきましたが、出版社を始めることは、そういった半農半 X の暮らしの実現を後押しすることにもつながります。最初は事務所を借りるつもりだったので、事務所を田舎に置くことも考え、実際に東京近郊に土地や家を見に行ったりもしま

した。

結局、自宅に事務所を置くことになり、家探しは自然と中断してしまいましたが、出版の仕事は都心から離れたところでもまったく支障なくできることがはっきりしたので、もう少しゆとりができれば、田舎暮らしも再度検討してみるつもりです。もし実現したら、と想像するだけでも楽しいです。

それに、自営ですから、経営的に行き詰まらないかぎり、何年でも続けることができます。いつまで働くか自分で決めることができる、これは出版社を始めるときには意識していなかったことですが、このことに気がついて、なんだかおまけのご褒美をもらったようなうれしい気持ちになりました。出版社を「これ以上ないタイミングで始めた」と思うのは、こんなときです。

創業に後悔なし

昨年 4 月、自分の出したい本を出す、だけを理念に出版社を始めわけですが、この間 5 点刊行し、その理念もまずは実現しました。しかし、実を言うと、自分の出したい本を出す、というシンプルすぎるくらいシンプルな理念を実現するのは、もしかしてものすごく大変なことなんじゃないかと思うようになりました。少なくとも簡単ではないことを、この一年で実感しています。ですので今、多少その辺のところ揺れていて、やっぱり本が売れてくれないと困るよな、出したいだけでは出せないよな、など雑念が入ってきたり、いやいや、やっぱりと思い返したり、をゆる～く繰り返しています。

ただ、それ以外では、自分で出版社を始めてよかった、よかった、万々歳！の毎日です。何が一番うれしいかと言って、時間を 24 時間ほぼすべて自分の思いどおりにできること、それに尽きます。その解放感たるや、定職に就かなかつた 20 代のころを彷彿とさせ、あのころの自由な精神を取り戻したかのような錯覚さえ与えてくれます。

その意味では事務所を自宅に置いたことも大正解でした。経費節減のためやむなくそうしたのですが、もともと狭い自宅がさらに狭くなってテナヤワンヤかと思えばそうでもなく、思っていたよりは支障なく回っています。それよりも何よりも、通勤がなくなったこと、この喜びが大きいです。通勤時間や交通費の節約だけでなく、通勤電車のストレスからも解放され、うれしくてたまらないです。

そうなると現金なもので、長時間労働も逆に平気でこなすようになりました。会社勤めのころは、子どものことがあるとはいえ、基本的に 9 時 5 時厳守、それを誇りにさえ思っていたのに、です。ただし、これも長時間労働のあと好きなだけ休めるという保証があるからですが。

自宅を事務所にする中で最も心配だったのは、時間の管理でした。時間管理にまったく自信がないため、公私のけじめがつかないのではないかと心配したのですが、実際その通りになりました。しかし、ここで開き直り、やることさえやればいいじゃないかと思ったら、とても気が楽になりました。今は勤務時間を決めず、好きなときに働き、好きなときに休み、気が向いたら家事をして、の毎日です。勤務時間はやっぱり決めたほうがいいんじゃないかと思うときもありますが、当分はダラダラ方式でやっていくことにします。

わたしの本たち

これまでに刊行した5点は以下のとおりです。それぞれの本への思いなどを綴ってみました。

① 創業第一作：『AIDで生まれるということ——精子提供で生まれた子どもたちの声』（非配偶者間人工授精で生まれた人の自助グループ・長沖暁子編著）

この本が創業第一作だったことは、ほんとうに幸運でした。AIDで生まれた当事者が自分の思いを自分の言葉で綴った初めての本で、類書がないこと、ちょうど国会に自民党有志による日本で初めての生殖医療法案が提出されるかもしれないという状況だったため、多くのメディアが取り上げてくれて、刊行1か月半で増刷、その半年後に再度増刷（3刷）になりました。

この本の企画は2004年、AIDで生まれた当事者であるアメリカ人のビル・コードレイさんの講演を聞いたことがきっかけで生まれました。すぐに原稿を書いていただけないということにはならなかったのですが、粘り強く著者グループに働きかけ、10年越しのラブコールが実って、本になりました。しかも版元が自分の創業した出版社だったこと、そのうえ創業第一作だったことに感謝するとともに、巡り合わせの不思議を感じます。

この間、AIDだけでなく、卵子提供や代理出産など第三者の関わる生殖補助医療やそれ以外の不妊治療についても多くの問題があることを学んできました。これからも地道にこのテーマをとりあげていくつもりです。

② 創業第二作：『紀見峠を越えて——岡潔の時代の数学の回想』（高瀬正仁著）

本書は、著者・高瀬正仁さんが「数学セミナー」に1990年～1991年にかけて連載した初めてのエッセイをまとめたものです。実は高瀬さんとは30年来の友人で、連載当時「紀見峠を越えて」の手書きの原稿を送っていただいたことがあります。そのころは出版の仕事をするとは思っていませんでしたが、その原稿をわたしが本にすることになろうとは……感慨もひとしおです。

高瀬さんは、『評伝 岡潔』（星の章、花の章〈海鳴社〉、虹の章〈みみずく舎〉）、『岡潔 数学の詩人』（岩波新書）と、岡潔に関する著作をすでに何冊も出している、岡潔研究の第一人者です。岡潔の唯一の弟子と言ってもいいかもしれません。15歳で出会って以来、岡潔に魅了され、その数学を真に理解し、岡潔がやり残したことを引き継いで究明することに、生涯をかけてきた人なのです。

すでに何冊も刊行しているのに、あえて本書を出したのは、本書が岡潔の数学のまたとない入門書になっていると思うからです。読者は、著者が岡潔の数学を理解しようと辿る苦難と情熱に満ちた道程と一緒に辿ることで、理解するとまではいかななくても、難解な岡潔の数学の、その一端に触れることはできるのではないのでしょうか。

③ 創業第三作：『精神医療の現実——処方薬依存からの再生の物語』（嶋田和子著）

精神医療の問題を知ったのは、知人がうつ病になり病院に通っても一向によくならず社会生活を送れなくなったことからです。そんなとき、著者・嶋田和子さんのブログ「精神医療の真実」を読み、すぐに連絡をとりました。お会いしたのは数年前、同じ年ということもあって意気投合し、以来飲み友だちです。

本書を読まれた方は、ぜひブログ「精神医療の真実」ものぞいてみてください。安易な薬物療法で苦しんでいる当事者や家族からの深刻な訴えが引きも切らず、それらの記事に寄せられるコメントも切実です。嶋田さんはひとつひとつのコメントに丁寧に答えていて、その誠実な姿勢にはいつも感心しています。何せコメント数が半端じゃないのです。20や30はザラで、ときに100を超えることも。

萬書房を創業した目的のひとつは、精神医療の問題を世に問う本をつくることです。生殖補助医療の問題と同様、地道にこのテーマを追いかけていくつもりです。次作として統合失調症の患者さんに薬物療法以外の治療法を試みた70~80年代のアメリカの研究「ソテリア・プロジェクト」についての本「Soteria」(L.Mosher)の翻訳出版を予定しています。

④ 創業第四作：『もりはマンダラー——もりと人との愛の関係』（徳村彰著）（注：本書では「もり」の字は、「森」を使わず、著者が木3つの代わりに木と水と土を組み合わせで作った作字を使っています）

著者・徳村彰さんが主宰する「もりの子どもの村」は北海道紋別郡にあります。上の子どもが小学校2年生のとき、誘ってくださる方がいて、「もりの子どもの村」に子どもを参加させたことがありました。わたしも行きだけ同行し、子どもの村で何泊かしました。水道も電気もガスもないもりの中でのテント生活です。幼児だった下の子ども一緒だったため、大変な面もあったのですが、もりの不思議の力にすっかり魅了されました。ところが肝心の子どものほうは、夏にもかかわらず雨続きで寒く、いつもよりさらに苛酷だったためか、その生活に耐えられず、体調もくずして、最悪の状態で帰ってきました。以来「もりの子どもの村」には絶対に近づきません。親のわたしは、もりで過ごしたほんの数日が忘れられず、会社を辞めたあと再訪、それがご縁で、本書を刊行することになりました。これも不思議な巡り合わせです。

本書でおじじ（徳村彰さんの通称）が説く、「ねばならない」を捨てる、にすっかりはまっています。今年の春は東北のブナのもりを訪ねる予定です。

⑤ 創業第五作：『あたたかい病院』（宮子あずさ著）

著者・宮子あずささんとのお付き合いはかれこれ20年以上になります。にもかかわらず、書籍の仕事は今回が初めてです。雑誌では何回かご執筆いただいたことがあり、転職を繰り返しても途切れることなくお付き合いを続けていただけてきました。本書の企画も、提案したのは10年以上前になります。『AIDで生まれるということ』と違って、原稿の執筆は最初から引き受けていただいていたので、あとは原稿の完成を待つだけだったのですが、待つこと10年、気長に待った甲斐がありました。

この本に登場する看護師さんはどの人も素敵なのですが、中でも年配の看護師さんが実に味があって魅力的です。「サイコロ振るしか決まらないようなことがたくさんあるでしょう、この仕事」帯にも使った言葉ですが、看護とサイコロの取り合わせが絶妙で、何とも言えないおかしみがあって、好きな言葉のひとつです。

